モンゴル帝国の興隆と衰退
～大英帝国との比較を通して～

2018年度インターゼミ　アジアダイナミズム班
学部生　　：森川和洋・西條史都・小出幹・乳井優
大学院生　　：米山憲二郎・光永和弘
卒業生・修了生：越田辰宏・塚原啓弘・山口夏実
指導教員　　：金美徳・水盛涼一・加藤みずき

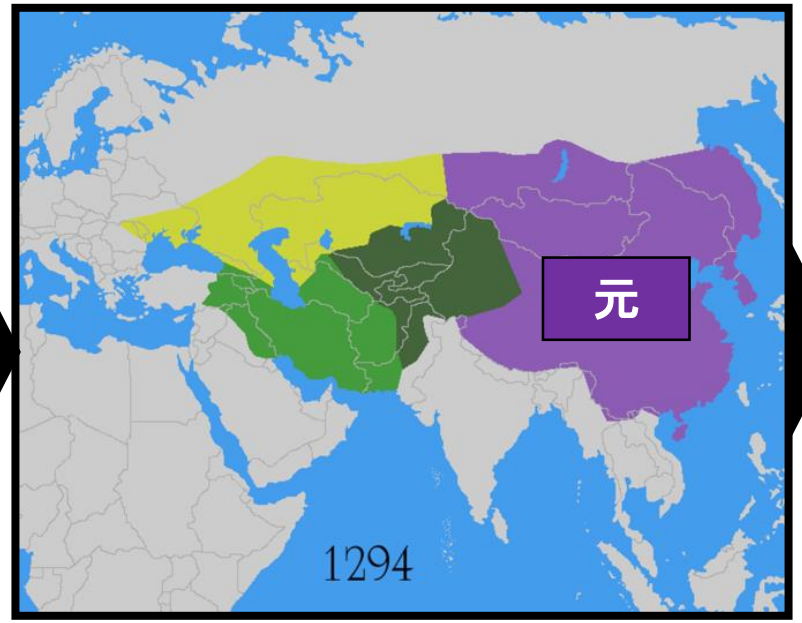
研究方法は、文献研究とフィールドワーク。

文献研究を通じて、モンゴル帝国の歴史的分析を行う。
また経済史、経営組織論の観点からも分析を加えていく。

フィールドワークは、中国（北京）とモンゴルの2カ国に訪問。
中国（北京）では、モンゴル研究の専門家へのヒアリングを実施予定。
モンゴルは、多摩大学のモンゴル研修に、学部生２名が参加し、博物館などで、関係者へのヒアリングを実施予定。

従って、研究対象は、モンゴル帝国の１３～１９世紀の７００年の歴史とする。

モンゴル帝国「13世紀の興隆」から「14世紀～17世紀の衰退」



出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mongol_Empire_map.gif

出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%97%E5%85%83

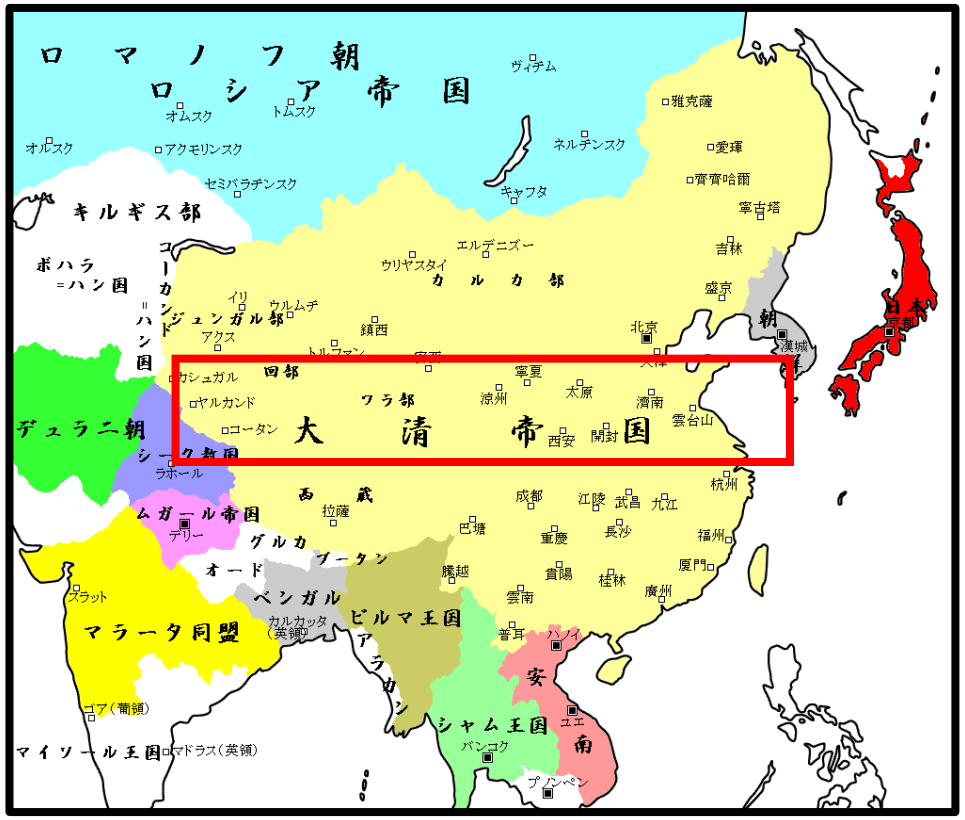
13世紀　最大の版図

モンゴル帝国の
「繁栄」

1294年クビライ死去～
1368年大明帝国成立
モンゴル帝国の
「衰退」が始まる

1368年大明帝国成立
モンゴル帝国（元）は
「北元」に

17～19世紀の大清帝国は、モンゴル帝国（元）の正統継承帝国



1911年モンゴルは
大清帝国からの独立宣言

1912年　大清帝国滅亡

1635年北元滅亡
・モンゴル帝国最後の皇帝、第41代「エジェイ・カーン」

1636年大清帝国成立
・満州人、モンゴル人、漢人の帝国
・皇帝は満州人
・初代皇帝ホンタイジの妻は、チンギス・カーン末裔

19世紀 「大英帝国との比較」

年表

中国	モンゴル帝国	大英帝国	日本
	1200 タイチュウト族の戦い	1154 プランタジネット朝成立	1192 源頼朝征夷大将軍となる
	1202 コイテンの戦い		
	1203 カラカルジト砂漠の戦い		
	1204 ラクダ原の戦い		
	1205 西夏攻略（モンゴルの誕生）		
	1206 モンゴル帝国成立 興隆期		1205 新古今和歌集
	1211 第一次金国攻略戦争	1215 ジョン王、大憲章マグナカルタ	
	1218 クチュルク討伐→西遼を併合	1216 ジョン王死去	
	大西征（中央アジア征服戦争）	ヘンリー3 世王位継承	1219 源頼朝が暗殺される
	1221 インダス川の戦い		1221 承久の乱
	1223 カルカ川の戦い/タタルのくびき		1223 道元、入宋
	1226 西夏再攻略		
	1227 チンギス・カーン死す		
	1229 オゴデイ即位		1232 御成敗式目制定
	1255 バトゥが死去		1253 日蓮、日蓮宗を開く
			1260 日蓮「立正安国論」

年表

中国	モンゴル帝国	大英帝国	日本
	1294 クビライ・カーン死去	1284 イングランド、ウェールズを併合	1274 蒙古襲来
1368 朱元璋が元を北に追放、明朝成立	1368 北元成立　衰退期	1371 ステュアート朝成立	1333 鎌倉幕府滅亡
1402 靖難の役、永楽帝即位	1370 ティムール朝成立	1381 ワットタイラーの農民一揆	1404 勘合貿易開始
	1380 クリコヴォの戦い	1485 テューダー朝成立	1549 フランシスコザビエル来航
1421 明朝を北京に遷都	1410 明の侵攻を受ける	1534 イギリス国教会成立	1592 朱印船貿易
		1588 スペイン無敵艦隊撃	1603 江戸幕府成立
	1604 リグダン・カーン即位	1600 東インド会社設立（EIC）	1609 琉球王国薩摩藩の支配下に入る
1616 女真族ヌルハチ、満州に金を建国	1616 ヌルハチ・ジュシェン族統合		
1636 ホンタイジ、後金を清に改める	1634 北元滅亡	1640 ピューリタン革命	1641 オランダ商館を出島に移す
1644 明朝滅亡		1707 グレートブリテン連合王国成立	
1661 康熙帝即位		1776 植民地アメリカを失う	1774 杉田玄白「解体新書」
1689 ネルチンスク条約		1807 奴隷貿易の廃止	1804 レザノフ長崎来航
1722 雍正帝即位		1815 ワーテルローの戦い	
1735 乾隆帝即位、清朝絶頂期		1819 ピータールーの虐殺	1825 異国船打払令
1796 白蓮教徒の乱		1837 ビクトリア女王即位	1837 大塩の乱
1840 アヘン戦争		1848「共産党宣言」発行	1853 ペリー来航
1851 太平天国の乱		1853 クリミア戦争	1868 明治維新
1858 ムガル帝国滅亡、英→印直接統治		1857 セポイの反乱（インド大反乱）	1879 沖縄県を設置、琉球王国滅亡
1894 日清戦争		1897 女性参政権教会全国連合結成	1894 日清戦争

モンゴル帝国の「興隆」に関する問題意識

1. なぜモンゴル帝国の戦い方は、これほど後世に影響を及ぼしたか。

（巧妙な計画、馬に乗りながら弓を射る技術）

⇒第3章「モンゴル帝国の興隆の要因」　森川

2. モンゴル民族の忍耐力は、どのようにして育まれたか。

（火を通さない肉だけ食べて10日間も行軍していた、口に入るものならなんでも食べていた、泥水も啜っていた）　⇒第3章「モンゴル帝国の興隆の要因」　森川

3. モンゴル帝国の支配下に置いた国々を、自分たちと対等の仲間と見ることができる懐の深さは、どのようにして生まれたのか。

（被占領国の男子の10人に3人を徴兵、本来なら逃亡したり反乱を起こしたりする恐れのある兵士の多くが占領者に忠実であった。2017年度の論文を踏まえて深める）

⇒第3章「モンゴル帝国の興隆の要因」　森川

モンゴル帝国の「興隆」に関する問題意識

4. チンギス・カーンの行動は、破壊的かつ残虐的であると史実上言われているが、彼の行動が偉業として残り、人々に慕われていたのは、なぜか。
⇒第3章「モンゴル帝国の興隆の要因」　小出

5. モンゴル帝国では、チンギス・カーンの高原統一の頃から、戦わずして、指導者同士の話し合いだけで解決し、人命を損なうことを回避していたが、それはなぜか。
⇒第3章「モンゴル帝国の興隆の要因」　乳井

モンゴル帝国の「衰退」に関する問題意識

1. モンゴル帝国の衰退に影響した後継者争いの原因は、何か。

（リーダーの選び方による影響）

⇒第4章「モンゴル帝国の衰退の原因」（1）後継者と相続　　米山

2. カーン（皇帝）が変わるたびに影響力が弱まったのは、なぜか。

（相続による資産の分配による影響）

⇒第4章「モンゴル帝国の衰退の原因」（1）後継者と相続　　米山

3. モンゴル帝国の宗教的多様性は、なぜ崩壊したのか。

（モンゴル帝国は、宗教の多様性（※現在までの研究で5つ以上確認）を認めることで興隆したが、チベット僧の専横が民衆の反乱一因になった）

⇒第4章「モンゴル帝国の衰退の原因」（2）疫病と宗教　　山口

注記：カーンはモンゴル帝国皇帝で世界で唯一の地位、カンは帝国を構成する諸国の国王

モンゴル帝国の「衰退」に関する問題意識

4. 衰退の一因である疫病の蔓延は、どれほどの規模であったのか。
また、それらを防ぐことはできなかったのか。
⇒第4章「モンゴル帝国の衰退の原因」（2）疫病と宗教　山口

5. 経済・通貨システムの崩壊は、モンゴル帝国の衰退にどのような影響を与えたのか。
（近代西欧型社会システムに先んじた先見性、通商インフラ整備が疫病の蔓延を助長したという二面性をどう捉えるか）
⇒第4章「モンゴル帝国の衰退の原因」（3）経済システム　塚原

6. モンゴル帝国を構成する諸国に対する、カーン（皇帝）の影響力と権威は、興隆期と衰退期では大きな差異が、生じていたのではないか。
（チンギス・カーン～クビライ・カーン迄の興隆期と、クビライ後の衰退期 との影響力と権威の差異）
⇒第4章「モンゴル帝国の衰退の原因」（4）15世紀以降に遺されたもの 光永

モンゴル帝国の「衰退」に関する問題意識

7. カーン（皇帝）の影響力と統治システムは、現代の企業における、持株会社制度下の親会社の影響力による繁栄・衰退に通じるものはあるのか。
⇒第4章「モンゴル帝国の衰退の原因」（4）15世紀以降に遺されたもの
光永

8. モンゴル帝国の没落は、体制崩壊としての「衰退」と見るか、或いは経済循環のような好不況としての一時的「不況」と見るか。
歴史的評価の物差しは何か。
⇒第5章「大英帝国との比較」
越田

論文目次

１．はじめに

２．13世紀～19世紀までのモンゴル帝国とユーラシア史の変遷

３．モンゴル帝国の興隆の要因　～13世紀を中心に～
（1）理想
（2）忍耐力
（3）連帯性
（4）戦術
（5）物流
（6）情報ネットワーク
（7）ガバナンス

論文目次

4. モンゴル帝国の衰退の原因
　（1）後継者と相続
　（2）疫病と宗教
　（3）経済システム
　（4）15世紀以降に遺されたもの

5. 大英帝国との比較

6. おわりに
　本研究から学ぶ現代的意義

「モンゴル帝国の繁栄と衰退～大英帝国等の覇権国家群の「関係性」と「指標」比較から、現代に繋がる視界を考察～」

問題意識：モンゴル帝国の没落は、体制崩壊としての「衰退」と見るか、或いは経済循環のような好不況としての一時的「不況」と見るか。歴史評価の物差は何か。

	中国文明（中華帝国）		地中海・西ヨーロッパ文明	
覇権国家	**モンゴル帝国（13－14世紀）元**	**大清帝国（モンゴル帝国後継）（17－20世紀）**	**大英帝国（19世紀）**	**オランダ（17世紀）**
1.世界システム論	**周辺**(夷狄)、大陸型 チンギス統原理(カリスマ性)	中核 天朝論理(正統、天下一家)	**中核**、海洋型 海外植民地型(東インド会社)	中核、海洋型 資源小国(清教徒亡命・移住)
2.**統治**・国家力 (行財政力・軍事力)	**小さな政府**（部族連合・遊牧民論理)、騎兵力 タタールの軛(ロシア・中国史のトラウマ)	大きな政府 （科挙・官僚制を継承）、定住民社会	**大きな政府**(高い行財政能力、軍事は議会に従属、富の動員(課税・商業社会)	小さな政府(自治権有する都市連合) 、通商国家(商業金融)
3.経済競争力 (経営・産業力・資源)	**ユーラシア交易ネットワーク**(遠距離貿易)、世界初不換紙幣(信用取引)	世界GDP20-30% (明・清時代)	**ジェントルマン資本主義**(金融、エンジニアリング)、二つの三角貿易(英印中/奴隷貿易)	バルト海貿易、造船業、近郊・換金作物農業、オランダ東インド会社（17拠点2.5万人）
4.**宗教**文化力 (行動規範・非合理)	**多様性温存**(多様な文化吸収) **宗教に寛容・共生共存**	漢字文化圏 (儒教・漢訳仏教・律令)	**国際公共財(英語・英国法・スポーツ)**、節度・穏健態度・正義、**キリスト教海外伝導協会**	プロテスタンティズムの倫理
6.民力(豊かさ・所得・都市農村力)	モンゴル人2%、**多民族登用、実務能力重視**	満州人+同盟(モンゴル人,漢人)⇒漢人提携(満漢一家)	非経済合理主義(社会的威信) 食文化衰退(調理法く熱量)	法の下平等・民主的意思決定・多様価値尊重・宗教自由
7. 未来性・潜在力	国民国家システムでは人口＝国力 **「世界はモンゴルの末裔」の意味**	**大中華圏(華人・華僑ネットワーク)**、中華帝国の復興(民族宗教を超越)	**英連邦と「ユニオンジャックの矢」(ソフトパワーとネットワーク力)**	米国社会の基底

＜仮説＞　モンゴル帝国等の「帝国」型統治は、統合の緩やかさ・構成員の多様性共存に寛容と言われる。他方、大英帝国等の「国民国家」（19C－）は、統合重視（一体性・均質性）、多様性（言語・民族・宗教）共存には不寛容と言われる。仮に国民国家の体制に次の段階があるとすれば、モンゴル帝国興亡の本質・真実（事実ではなく）探求の中から、現代に繋がる視界が見えてくるのではないか。

出所：各種資料より著者作成。越田辰宏

参考文献一覧〈論文〉

1. 寺島実郎「脳力のレッスン　第189回　モンゴルという衝撃―十字軍と蒙古襲来―十七世紀オランダからの視界」(その46)『世界』(岩波書店、2018年1月号)
2. 寺島実郎「脳力のレッスン　第193回　大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト―17世紀オランダからの視界」(その48)『世界』(岩波書店、2018年、5月号)
3. 秋田茂編『イギリス帝国と二〇世紀』第一巻『パクス・ブリタニカとイギリス帝国』（ミネルヴァ書房、2004年5月）
4. 岡田英弘「世界史の中の大清帝国」(岡田英弘編『清朝とは何か』2009年5月)
5. 村岡倫「現代モンゴル皇族とチベット仏教－－成宗テムルの信仰を中心にして」（佛教史学研究第39巻第1号1996年10月25日）
6. 岸本美緒「「近世化」論と清朝 」(岡田英弘編『清朝とは何か』2009年5月)
7. 木村和男編『イギリス帝国と二〇世紀』第二巻『世紀転換期のイギリス帝国』（ミネルヴァ書房、2004年12月）
8. 杉山清彦「近世化ユーラシアの中の大清帝国」(岡田英弘編『清朝とは何か』2009年5月)
9. バイカル「モンゴル帝国時代の仏教とキリスト教—カラコルムの宗教弁論大会を中心として」（東洋大学国際哲学研究センター編集委員会編『国際哲学研究』別冊第六号『共生の哲学に向けて—宗教間の共生の実態と課題』東洋大学国際哲学研究センター、2015年3月）
10. 森川哲雄「17世紀から18世紀初頭のモンゴル年代記について—特に「蒙古源流」と「シラ・トゥージ」との關係を通して」（『東洋史研究』第61巻第1号、2002年6月）
11. 脇村考平「疫病と世界」(『世界史のしおり22』 2004年）

参考文献一覧〈書籍〉

1. 寺島実郎・渡辺利夫・朱建栄『大中華圏—その実像と虚像』（岩波書店、2004年10月6日）
2. 寺島実郎『大中華圏—ネットワーク型世界観から中国の本質に迫る』（日本放送協会出版、2012年12月21日）
3. 寺島実郎『ユニオンジャックの矢—大英帝国のネットワーク戦略』（日本放送出版、2017年7月25日）
4. 岩村忍『文明の十字路＝中央アジアの歴史』(講談社、2007年2月10日)
5. 上田信『中国の歴史09』 海と帝国　明/清時代』(講談社、2005年8月26日)
6. 岡田英弘『モンゴル帝国の興亡』（筑摩書房、2001年10月）
7. 岡田英弘『清朝とは何か』（藤原書店、2009年5月）
8. 岡本隆司『世界の中の日清関係史』(講談社、2008年8月)
9. 尾形勇、岸本美緒編『中国史』（山川出版社、1998年6月1日）
10. 金岡秀郎『モンゴルを知るための65章【第２版】』(明石書店、2012年6月28日)
11. 五味文彦、鳥海靖編著『新　もういちど読む山川日本史』（山川出版社、2017年8月1日）
12. 堺屋太一『堺屋太一が説くチンギス・ハンの世界』（講談社2006年2月11日）
13. 篠原修『雨森芳洲 朝鮮学の展開と禅思想』(明石書店、2015年7月30日)
14. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(下)』(講談社、1996年6月20日)
15. 杉山正明『興亡の世界史 モンゴル帝国と長いその後』(講談社2016年4月12日)
16. 田村実造『中国文明の歴史〈7〉大モンゴル帝国』(中央公論新社、2000年8月1日)

参考文献一覧〈書籍〉

17.ハイシッヒ、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』（岩波文庫、2000年12月15日）

18.平野聡『清帝国とチベット問題―多民族統合の成立と瓦解』（名古屋大学出版会、2004年7月10日)

19.ボルジギン・ブレンサイン編著『内モンゴルを知るための60章』(明石書店、2015年8月1日)

20.村上信明『清朝の蒙古旗人 その実像と帝国統治における役割 (ブックレット〈アジアを学ぼう〉 4)』
（風響社 2007年11月1日）

21.森万佑子『朝鮮外交の近代 宗属関係から大韓帝国へ』(名古屋大学出版会、2017年8月10日)

22.愛宕松男・寺田隆信『モンゴルと大明帝国』
（もと『中国の歴史』第六巻『元・明』講談社、1974年11月。のち講談社学術文庫、1998年2月）

23.Jean-Paul Roux. Gengis Khan et l'Empire mongol. Paris: Gallimard, 2002.
（杉山正明監修、田辺希久子訳『チンギス・カンとモンゴル帝国』創元社、2003年10月）

24.John Brewer. The Sinews of Power: War, Money and the English State, 1688-1783. London: Unwin Hyman, 1989.
（大久保桂子訳『財政＝軍事国家の衝撃—戦争・カネ・イギリス国家一六八八–一七八三』名古屋大学出版会、2003年7月）

25.Robert Marshall. Storm from the East: From Genghis Khan to Khubilai Khan. Oakland: University of California Press, 1993.
（遠藤利国訳『図説 モンゴル帝国の戦い—騎馬民族の世界制覇』東洋書林、2001年6月）

参考文献一覧〈書籍〉

26.Peter Cain and Anthony Gerald Hopkins. British Imperialism: innovation and expansion 1688-1914. London: Longman, 1993.
（竹内幸雄・秋田茂訳『ジェントルマン資本主義の帝国』第一巻『創生と膨張—一六八八—一九一四』名古屋大学出版会、1997年4月）
27.Peter Cain and Anthony Gerald Hopkins. British Imperialism: crisis and deconstruction 1914-1990. London: Longman, 1993.
（竹内幸雄・秋田茂訳『ジェントルマン資本主義の帝国』第二巻『危機と解体—一九一四—一九九〇』名古屋大学出版会、1997年4月）
28.William Hardy McNeill. Plagues and People. New York: Anchor Books Doubleday, 1976.
（佐々木昭夫訳『疫病と世界史』新潮社、1985年5月）
29. Jeremy Rifkin・柴田　裕之訳　『限界費用ゼロ社会〈モノのインターネット〉と共有型経済の台頭』（2015年・NHK出版）

参考文献一覧〈サイト〉

1.　2018　世界の歴史マップ「モンゴル帝国の成立」http://www.geocities.jp/timeway/kougi-42.html

フィールドワーク

1. 訪問地：中国　北京市（8名）

（1）日　程：2018年8月13日（月）～16日（木）3泊4日

（2）調査先：

①中国人民大学清史研究所　教授　張永江氏　清代 モンゴル統治制度研究
②吉林師範大学満族文化研究所　教授　劉小萌氏　清代国制史
③北京市社会科学院満学研究所　所長　趙志強氏　清代 国制史
④中国社会科学院歴史研究所科研処　副処長　博明妹氏　近現代少数民族研究
⑤中国第一歴史档案館蒙文部　部長　李保文氏　清代モンゴル語文献整理保存研究
⑥故宮（紫禁城）　⑦積水潭（大運河の北端）
⑧モンゴルがつくった寺院・白塔寺　⑨モンゴルがつくった北京城の城壁

2. 訪問地：モンゴル　ウランバートル市（2名）

（1）日　程：2018年8月29日（水）～9月4日（火）6泊7日

（2）調査先：

①博物館・寺院・歴史的建造物　②日系企業・国際NPO
③遊牧民家族訪問　④モンゴル財政経済大学

年間スケジュール

	月	日	議　題	文献調査	フィールドワークFW	備　考
1	４月	14	初回学長講話			
2		21	自己紹介・班検討			
3		28	テーマ方向性 18世紀のモンゴル・中国・朝鮮半島・日本	次回ベース文献各自2冊以上報告	予約・見積（水盛先生）	班メンバー決定
4	５月	12	学長論考に関する発表 テーマ決定	各自文献2冊以上共有		年間スケジュール FWスケジュール
5		19	分担発表		FW訪問先決定	
6		26	分担発表	文献集計・目次		
7	６月	2	分担発表 研究計画発表PPT確認			
8		9	研究計画発表リハーサル PPT			
9		16	**◎研究計画中間発表**	**研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク**		**14時半集合**
10		23	研究計画発表反省 中間発表に向けた計画			
11		30	箱根合宿発表目次立て	中間発表に向けた討議	訪問先の調査内容	
12	７月	7	**日本国際文化学会・ 学長講演**	**湘南キャンパスにて開催**		
13		14	分担発表	問題意識レポート、PPT作成	各自担当FW訪問先の調査	
14		21	箱根合宿発表PPT確認	問題意識レポート、PPT作成	各自担当FW訪問先の調査	春学期最終回
			夏期休暇期間			
	８月	2-3	**8/2（木）-3（金）** **夏合宿（箱根）中間発表** 合宿先 ： 箱根水明荘（箱根町湯本702）TEL.0460-85-5381（代） http://www.suimeisou.com/access/index.htm	●発表者（役割分担）：1研究概要、2目次、3　内容、4参考文献・研究計画・FW ●日程案： （1日目） 12:30会場集合、 13:00集合（B1F）合宿日程説明、 13:05中間発表（15分）＋質疑応答（20分）、15:40-16:40教員発表、 16：40～全体講評、 夜　懇親会 （2日目） 9:00寺島学長講話、 10:40グループ学習、 12:00過ぎ解散 （連絡：学長室　高野takano@tama.ac.jp）		
		13-16	**8/13（月）-16（木） フィールドワーク①**	●中国　　北京市　　3泊4日　8名参加		
		8/29-9/4	**8/29（水）-9/4（火） フィールドワーク②**	●モンゴル　ウランバートル市　6泊7日　2名参加		

年間スケジュール

15	９月	15	秋学期の日程確認			
16		22	FW報告 今後の論文計画		FW報告（講義内）	
17		29	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告）		
18	10月	6	分担発表			
19		13	分担発表			
20		20	過去執筆データについて 作成に当たっての注意			
21	１１月	3	執筆文章推敲 最終発表PPT作成			
		10	学園祭（講義なし）			多摩大学学祭
22		17	PPT・論文推敲全体確認			
23		24	PPT・論文　AL祭・最終発表に向けて			
24	12月	1	PPT・論文　AL祭・最終発表に向けて			
25		8	**アクティブラーニング（AL）祭**			
26		15	**最終発表の最終確認**	最終発表、論文目次調整、論文推敲		
27		22	**最終発表・ 指導教員へ論文提出**	論文（紙媒体）⇒教員は冬休み中に論文確認		12/22 年内最終講義
28	1月	5	最終調整、論文完成	教員からのフィードバック 最終修正部分確認		
		12	センター試験（講義なし）	論文最終確認作業		
29		19				
30		26	**最終論文提出（完成版）** 最終講義	提出者、提出方法		

ご清聴ありがとうございました